

2020年12月2日

立教と名の付く学校の前身となった「立教学校」は、一八七四年二月に東京築地に産声を上げました。創設者は一八五九年、二十九歳でアメリカから来日した宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズ先生です。大学のチャペルの横と小学校の門を入ってすぐ右側に銅像が立っています。キリスト教信仰が禁止されていた日本人々に、神さまの愛を伝えるため祈り続けられました。



三十日の月曜朝礼では次のような話をしました。

(手話で)「みなさん」「おはよう」「ございます。」
今週の水曜日、十二月二日はウィリアムズ主教様を記念する特別な日です。立教と名の付くすべての学校のもとになる「立教学校」をつくってくださった先生です。それは、今から百四十六年前の小さな学校でした。

学校をつくるということは、やさしいことではありません。特にウィリアムズ先生が日本に来てくださった一八五九年の日本では、聖書と英語を教える学校など想像もできない状況でした。ウィリアムズ先生はその時二十九歳、アメリカで生まれ、学んだ後、神さまの言葉を伝えようと日本に来られました。しかし、そのころは日本の人に、聖書のお話をするには禁じられていました。ウィリアムズ先生も聖書の話をしていないか、見張られながら、聖書のお話ができる日がきますよう

にと祈り続けました。その日が必ず来ると信じて、毎日夜遅くまで、日本語の学びを続け、お祈りの本や聖歌を日本語に訳していました。

日本の人々のために祈り続けるということは、自分のできることがあれば進んで行うことも含まれます。皆さんも東日本大震災で被害にあわれた方々のために祈り続けていますね。そして、献金をおささげしたり、クリスマスカードを贈ったり、できることをしていますね。ウィリアムズ先生は、お仕事のためにアメリカに帰ったときも、たくさんの人たちに日本で聖書の話ができるように一緒に祈ってくださいと訴えました。また、アメリカの大統領や大臣の方たちに、日本のリーダーの人たちに聖書の話が自由にできること、神さまの愛を伝えることができるように説得してほしいと、直接お願いをしました。

そして、一八七三年、ついにウィリアムズ先生はじめ、たくさんの人々の祈りと行動は、日本のリーダーの考えを変え、禁止されていた聖書の話が自由にできるようになったのです。ウィリアムズ先生が日本に来てくださったから、十四年たったことです。その年の十一月、先生は東京に引越し、次の年一八七四年二月には、二名の先生と八人の生徒の小さな学校をつくられました。それが「立教学校」です。

日本の人々に「人はだれでも神さまに愛されている。」ことを伝え、学ぶ場所がこうして生まれました。先生は、その後七十九歳になるまで五十年間日本の人々のために神さまのことを伝えてく

だきました。いつも困っている人、弱い人に寄り添いました。そして、体の弱さを感じ、ふるさとアメリカに戻られ、八十一歳の十二月二日に天に帰られたのです。

今、ウィリアムズ先生の写真や日記など残されたものはほとんどありません。自分の行いが人にほめられないように、それらをアメリカに帰る前に焼いてしまったのです。「ほめられるのは、神さまだけです。」という強い思いがあったのです。ウィリアムズ先生の教えを引き継ぎ、神さまに愛されていることに感謝し、困っている人、悲しんでいる人、弱い人に気づき、助け、いっしょに生きる勇氣と賢さを立教で学んでください。
(手話で)「おはなしを」「おわかります。」



毎年十二月二日ウィリアムズ先生記念日の近くの朝礼で、お子さんたちに先生の話をしてきました。神さまの愛を信じ、祈り、粘り強く待ち、勇氣を持って行動しつつ、だれにでも親切で、常に謙遜であった先生の姿は、これからも立教が世界に示す姿であることを今さらながらに思うのです。